2022 年度　自己点検・評価報告書

理工学研究科評価分科会

2023 年 2 月(最終報告)

基準４　教育課程・学習成果

2023 年度カリキュラム改訂を予定している学部･研究科については､下記の内容について記入ください。

- **授与する学位ごとに、学位授与方針を適切に定めているか。**
- **授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を適切に定めているか。**
- **教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。**

2023 年度にカリキュラム改訂を行わない場合は、下記の内容について記入ください。

- **教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

【１】2021 年度の自己点検・評価で課題となった事項
1. 修士論文の採点基準に関して、検討を行い、必要に応じて修正を行う。 2. 研究科内の他専攻の科目を効果的にカリキュラムに取り組んでいく。 学生の側に立って､研究に専念できる環境を作るためにさまざまな手続き等の簡素化については検討を行う。

【２】2022 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
＜方針・改善計画＞ 研究科としては、生命理学専攻が博士後期課程の完成年度を迎えていないこと、教員の退職や異動に伴う配置の変化等を踏まえて、23 年度のカリキュラム改訂は最低限にとどめ、25 年度にある程度の規模のカリキュラム改訂を行う。そのために、教員の配置など基本となる部分に関して今年度は検討を行う。 ＜最終報告までの達成目標＞ 23 年度以降を踏まえた研究科内、専攻間、専攻内の意見聴取、意見交換を行う。特に数値的な目標などはおかないこととする。

【３】2022 年度の取組みの点検・評価と 2023 年度以降の方針
【2022 年度の取組みの点検】 1. 将来的な教員組織の構想を踏まえて､大学院担当の昇任基準の内規について各専攻で見直しを行った。 2. 学位（博士）の授与条件に関して、論文博士、課程博士の両方で検討を行い、論文博士（研究科全体）では語学の条件、課程博士（生命理学）では論文の条件について内規、学則の改定を行った。 3. 修士論文の採点に関しては 2 年目になり、昨年度を踏まえて見直しを検討した。 4. iThenticate の運用に関しては各専攻で状況の確認・検討を行った。
【今後の課題および 2023 年度以降の方針】 23 年度にさまざまな検討を開始し，25 年度からのカリキュラムに関しては 1 年間かけて議論を行う。

またそれを踏まえて、今後も教員の適正配置に関して引き続き検討をする。 23 年度から専攻を異動する教員がいるため、学生側に不利益がでていないかを確認する。

基準５　学生の受け入れ

- **学生の受入のための広報活動、および学生の受け入れの適切性について、点検・評価を行っているか。**
- **受入れ制度ごとに学生の学習状況を把握し、点検を行っているか。**

１．学生の受入のための広報活動、学生の受け入れの適切性について

【１】2022 年度の方針・改善計画・取り組み等（および中期的な改善計画）
＜方針・改善計画＞ 昨年の報告書に上げた 2022 年度以降の方針は 1.　春の学内選抜試験の出願基準に関して継続して検討を行う。 2.　学部 3 年生に対するガイダンスを検討する。 である。 ＜最終報告までの達成目標＞ 23 年度入学者数を研究科全体で 75 パーセント以上確保することを目標とする。

【２】2022 年度の取組みの点検・評価と 2023 年度以降の方針
【2022 年度の取組みの点検】 1 については、過去のデータを基に検討を行い、春の学内選抜試験に関しては、現在の基準をそのまま継続することとした。但し今後の推移については注視をすることとした。 2 については、専攻ごとに検討し、学部と連携をして、ガイダンスに限らず、いくつかの機会で大学院での学びに関するアピールを行った。 博士前期課程の入学予定者に関しては、定員の 75 パーセント以上となる見込みである。
【今後の課題および 2023 年度以降の方針】 今年度の取り組みを継続し入学者数に関しては注視を続ける。また、専攻毎に入試の定員配置、試験形態の検討をする。

学生の意見聴取

- **履修、授業、DP に関すること**

・ **昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について**
・ **学生生活アンケートから見える本学の傾向性について**

【１】2021 年度の意見聴取をもとに実施した検討や取り組みの内容
今年度の方針にしたものは、 1. 2021 年度に博士後期課程の学生支援に関して、理工学研究科を中心として JST の次世代研究者挑戦的研究プログラムに応募し大学として採択をされた。初年度は理工学研究科の学生 8 名が選ばれた。この制度の運用に関しては検討を継続して行う。 2. 修士論文の点数化に伴い、各専攻の最優秀論文を選び、研究科長賞として表彰を行う事業を始めた。2021 年度は各専攻 1 名ずつ修士論文の採点で選ばれた。採点については、点検を行う。また、学生の側の声も聞きつつ研究科として継続して行なっていく。 3. 22 年度に、JSPS の特別研究員（DC, PD）への応募を推進するために，希望者に対してコンサルティングを始める。 の 3 項目である。 1 に関しては、運営委員を中心に運用を随時見直し、改善を行なっている。コロナ感染症の感染状況をふまえて、徐々に海外インターンシップや学内でのイベントも開催できてきたので、より充実させていくように検討する。 2 に関しては、秋学期での修了者の採点も踏まえて確認を行った。来年度以降、受賞者の中で博士後期課程進学者に関しては、今後の研究状況を確認していく。 3 は研究科教員にボランティアを募り実際に行った。特別研究員への申請者数自体が少ないため、実際のコンサルティングの実施は１名であった。今後さらに採択者数の増加を目指し、コンサルティングに限らず支援策を検討していく。 上記 1-3 以外に、TA 制度やハラスメントに関しても学生から聞き取りを行った。TA 制度に関しては、結果として、さまざまな要因から過重な負担を強いることのないように研究科内で注意喚起を行った。ハラスメントに関しても、学生の気質も変わってきているので、熱心な研究指導が単なる精神的な圧迫にならないように注意喚起を行った。

【２】2022 年度の意見聴取を踏まえた 2023 年度以降の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
1. 教育目標、DP に関しては周知がまだ徹底されていないので、各種ガイダンスでの内容に取り込むこと、またその他の方法を検討する。 2. 大学院生の研究環境、学習環境に関しては随時学生の声を直接聞き、可能なところから改善を行う。 3. 大学院生、特に博士後期課程の学生に対する支援策について、国の政策・方針も踏まえて検討をする。